

どめた。

2. 第1回調査は、昭和42年9月、土浦短大生210名を対象に試みた。検討の上、昭和43年9月、第2回目の調査を行なった。調査対象は、土浦短大生、武庫川大学生、鹿児島県立鶴丸高校生の各150名である。

調査内容は、A)自分の生活態度、家族関係、社会と公衆道徳、B)家族および家庭の生活状況を調査し、これに評点を与えた。なお、A)の生活態度に、B)がいかなる関連をもつかを、核家族と拡大家族、両親の年齢、職業に焦点をあてて研究した。

3. 土浦短大生の調査分析の結果、評価の平均点は拡大家族より核家族の方が高く、最低点は拡大家族に集中していた。

核家族は64%、拡大家族は36%で、農家が全体の33%、拡大家族中の44%を占めていた。一般に両親の年齢は若い層に評価の高い者が多く、また職業よりみれば、農家は概して低い。

協力校においては、地域差はみられるが、評価については土浦短大とほぼ共通な傾向が現われている。

F-19 家庭生活診断に関する研究(第1報) —家族関係と生活態度について—

土浦短大 ○大和マサノ
武庫川女大家政 須見 恒子
鹿児島県立鶴丸高 小山田春子

1. 生活態度の意識調査をし、特にエチケツト生活の診断を試みようとするものである。今回は、予備調査として、自己および家庭の生活態度を評点化することにと